

展望

静かな歌

三沢左右

捨てるぞ」と教卓に笑ふ

「初恋」

みつよつとカラーボックス組み立てて血
豆つぶせばいつつめも立ちぬ

聞きづらいつときは顔寄せてくれることも
灯台の灯のやうで近づく

真中朋久『cicera』は、落ち着いた歌い
ぶりの中に、生活者としての厚みを持つ歌集
だ。丁寧な観察と描写の歌を基調に置きつつ、
ゆらぐ心境や箴言のような強い主張が随所に
現れる。そうした構成を一首中で実践するか
のような、一字空けの歌に注目した。

手のなかにあたためてゐるマグカップ

冷ましてゐるのと言ひたり

ふるき酒をあたらしき瓶に入れて売るご

ときなりはひのごときか

言霊を信じるといふにあらねども 危機

近づく ことを詠はず

字空けにより、ふつと歌の流れが中断され
る。格助詞の前で一字空けをする一、二首目、
ふたつの一字空けがある三首目、いずれも、
意味の流れが途切れているわけではないのが
面白い。ここで中断されるのは思考の流れだ。
一首の情景や比喩に、突如別の声がはさまこ
まれる。それはときに作者の声であり、とき
に他者の声である。一首の中に、情景からこ
ころへの転換、自己と他者の転換といった屈
折を作ろうとしたときに字空けが登場するの

だろうか。対象から適切な距離を取りながら
も、作者はゆらぐ。真中の歌は静かだ。それ
は、ゆらぎつつ、そのゆらぎさえ歌に留める、
芯の強い静かさだ。

他の作者の歌集も紹介する。栗木京子の
『新しき過去』と染野太朗の『初恋』だ。ど
ちらも静かな印象の歌集だが、違いもある。

葉の間にいちやうの緑き実の見えて新し
き過去かがやくごとし

栗木京子『新しき過去』

いま誰か地球の栓を抜きたるや寝返り打
てば鼓膜の痛し

栗木の短歌に描写されるのは、栗木の感
性というフィルターを通した世界だ。どの歌、
どのページにも作者の存在が色濃く刻み込ま
れる。歌集タイトルにもなった一首目では自
然の景を「新しき過去」という印象としてと
らえ直し、二首目では内的感覚を「地球の
栓」が抜けたという。いずれもスケールの大
きな比喩だ。栗木は、刻々と変化する世界を、
あくまで自身の視点から歌い上げる。
窓の外に干された体育着を指して「もう

一方染野は、一首目からわかるように、自
身をも客観的な視線で把握する。浮かび上が
る作者の存在は小さい。外界に大きな影響は
与えず、むしろ外界に翻弄される。二首目、

「カラーボックス」にささやかだが実在感が
ある。「血豆」に作者の身体が浮かび上がる
が、描写はあつさりしている。もしも自分の
存在を強調したいなら「血豆」をつぶすこと
が結句に来よう。私たちは、日々外界の変化
や予想外の出来事によって変化を余儀なくさ
れる。染野はその変化の過程を、まるで自身
を他者であるかのように距離感を保って描き
出す。染野の観察眼はフラットだ。それだけ

に、倫理観に結びつきがちな恋愛や性の歌に
は、どこか背德的な感覚が付きまとう。
静かな描写の歌、と一言に言っても、作者
によって様々な違いがある。その違いを生み
出すのは、単に外界に向けた観察眼だけでは
ない。「作者が自分をどう見つけているの
か」に大きく左右されるのだろう。